

奈良時代、長きにわたって日本を治めた聖武天皇は、古代史のキーパーソンの一人です。

その聖武天皇が東大寺の大仏をつくったことは広く知られています。大仏造営の詔の中には、民衆一人一人に一握りの土でもいいから大仏造営に参加してほしいという一文

があります。世界遺産である東大寺の大仏は、平安時代末に平重衡、戦国時代に松永久秀によって焼かれたものの、その都度民衆の力で蘇ってきたのです。天皇がつくったとはいえ、どれほど民衆に愛されてきたかがよくわかりません。

その大仏が、実は滋賀県甲賀市信楽町(当時は紫香楽)でつくり始められたことは広く知られているとはいえませんが、今回は、その経緯についてお話ししたいと思います。

長屋王の変、天然痘の流行によって社会情勢が不安定であった天平12年(740)。藤原広嗣が九州大宰府におい

て突如として兵を挙げました。世に言う広嗣の乱です。

唐から最先端の知識や技術を持ち帰り、天皇に重用されていた吉備真備や玄昉を除くよう要求したのです。すぐさま天皇は乱を平定すべく大野東人を将軍として九州へと派遣します。

その直後、乱が平定されていないにもかかわらず、なぜか天皇は騎兵隊を率いて平城京を出て東海地方へと行幸を始めます。聖武天皇は東人に、この時期に行幸することを不思議だと思っただろうけれど怪しまないように、と手紙で告げます。なぜこの時期に行幸しなければならなかったのか、この文面から天皇の真意はわかりません。広嗣の乱を恐れて、平城京から逃げ出したのだとする説もありました。

ともあれ、平城京を発った天皇一行は、伊勢国から美濃国を経て近江国へと至ります。このころには広嗣の乱は鎮圧されていたのですが、依

大仏造営の詔

聖武天皇の東国行幸経路



た。恭仁宮造営開始直前、天皇は琵琶湖岸を行幸しながら何を思ったのでしょうか。

しかし、近年の発掘調査成果をはじめとする研究から謎は少しずつ解き明かされつつあります。この5年間の天皇の足取り

然として天皇の行幸は続きました。琵琶湖東岸を南下して粟津頓宮へと至った時点で、進路をさらに南へと進めま

をたどると、天平14年には離宮(紫香楽宮)をつくり、幾度も行幸し、多くの時間を紫香楽で過ごしたことがわかります。

恭仁で終わりました。平城京には帰らず、そこで新しい恭仁宮と呼ばれる宮をつくりはじめてしまったのです。

天皇は紫香楽で何をしようとしていたのでしょうか。天平15年には、紫香楽の所在する甲賀郡を畿内並みの扱いとすること、その年の東日

この後、天平17年(745)までの5年間、天皇は平城京に帰ることはなかったのです。一見するとあまりにも不可解な行動から「彷徨五年」と呼ばれ、古代史上の大きな謎であるとされてきました。

本税を紫香楽に持ち込むことが決められます。このきわめて異例の措置は、ある大事業を実行に移すためになされたことでした。ある事業とは、紫香楽の甲賀寺における

大仏造営だったので。ここでつくられはじめた大仏とは、華嚴経などにみられる盧舎那仏でした。盧舎那仏とは、宇宙の真理をすべての人に照らし、人々を悟りに導くというきわめてスケールの大きな仏です。天平13年(741)の国分寺造営の詔とともに仏教を国家の軸とする鎮護国家の思想の中核にあたるものだったのです。

具体的にはわからないものの、甲賀寺での大仏造営事業は、少なくとも大仏殿の整地がなされ、粘土でつくられた大仏の原型は出来上がったようです。しかし、天平17年(745)の相次ぐ山

火事や群発地震に加えて不安定な社会状況を受け、紫香楽での大仏造営をあきらめて天皇は天平12年以後の長きにわたった行幸を終え、平城宮へと帰ります。その年の夏には東大寺において大仏造営事業が引き継がれていったのです。

(滋賀県教育委員会 畑中英一)

実は紫香楽ではじまった